

大峯今昔

銭谷武平著

私の生まれ育った三重県の山村には「大峯講」という組織があり、少年たちは一人前の男になるための通過儀礼として大峯修行をしなければならなかった。洞川（奈良県天川村）から先達に引率され、表と裏の行場を経て山上ヶ岳の大峯山寺に向かう。表の行場には鐘掛け岩や西の覗きがあり、裏の行場には蟻の戸渡

りや平等岩があつて、一日中岩にへばりついていた。その懐かしさに引かれて本書を手にした。洞川で陀羅尼助という秘伝の薬を造る家に生まれた92歳の著者が語るのは、大峯山系の動物や植物についての言い伝えや古い記録類の紹介、修験者のまわりや行場で起こった不思議な出来事、藤原道長の参詣や隠れキ

リシタンの大和配流、女人禁制のことなど長い時代にわたる大峯についてのあれこれ。命がけの岩草採りからツチノコ騒動まで、大峯のことならなんでもありの内容である。大峯修行というのは岩石に向き合うことだと以前から思っていた。本書を読むと、今は消滅した古い時代における岩屋での修行の記述があり、改めて修験道において岩石や洞窟が果たす役割を教えられた。（東方出版、2000円）